編集後記

嗚呼、嗚呼、三〇号哉！

本誌がついに三〇号に到達した。一年に秋・冬と二号ずつ発刊しているので、単純計算で一五年間ということになるが、途中、休刊した年もあったので、実際はもっと長くかかっている……と、第一号の発行日を確認してみると、「二〇〇六年四月二〇日」である。

三〇号の発刊は二〇二三年三月を予定しているので、ほぼ一七年間ということになる。編集担当者として感慨深い。第一号の目次をみると、巻頭を杉仁さんの「在村漢詩人とその書物出版活動」が飾っている。杉さんは、「書物・出版と社会変容」研究会（以下、書物研）に毎回出席され、何度も報告された。

そうした報告を論文にして、本誌に発表し、それらを軸として二〇〇九年に刊行されたのが『近世の在村文化と書物出版』（吉川弘文館）であった。同書は、翌年、徳川記念財団財団による第八回徳川賞を受賞するに至る。杉さんだけではなく、書物研の成果をもとにして単著を刊行している研究者は、少なくない。三〇号という発刊数もさることながら、そうした学問的成果を生み出してきたのが書物研なのである。

コロナ災禍で書物研はリモートになっている。対面のときは……いや、リモートでも、第一報告終了後、謎の全員自己紹介タイムというのがあり、これが長い。小一時間かかる。また、質疑応答も長い。延々とつづき、いつ果てるともなく、参加者が疲れて、発言が止むまでおこなわれる。洪水のような発言が、さみだれになったのを見計らい、司会の軍師が「最後に、これだけは言っておきたい、という人、何かありますか？」という。

普通の研究会であれば、これは「もうそろそろ終わりにしましょう」と閉会へ導く、阿吽の呼吸なのだが、そこが尋常一様ではない書物研のことで、「最後にどうしても」「これだけは」という人が一人ならず、数人現れたりする。

会場は一橋大学の佐野書院が定番になっている。終了後、大懇親会が行われる。懇親会は初期のころは、入口が国立駅南口ロータリーに面した地下一階、国立ビアホールであった。この店はやがて閉店し、その後、富士見通り沿いのダイモに変更となった。ダイモを探しだしたのは、なにを隠そう私なのだが、その理由は酒の持ち込みができるという点であった。そこで、持ち込みの芋焼酎やら日本酒やらの一升瓶が林立することになる。

そういえば、杉さんの発表は長かった。大抵二時間を超えてくる。なので、書物研の終了時刻は一九時を過ぎたりする。満を持しての最初の一杯の生ビールはたまらない……ということが、なつかしく思い出されたりする。あまりに楽しくなった数人が、ダイモ隣りの駐車場で、膝固め、逆十字、アンクルホールド……いや、この話はやめておこう。

懇親会といえば、他にも思い起こすことがある。幹事により、懇親会の案内が

行われている間に、席がロの字型になっている研究会場に目を転じる。すると、報告者と司会席のトイ面の二列目、ラグビーのスクラムでいうと、ロックとフランカーの位置にいる鈴木俊幸・高橋章則・岩坪充雄諸氏の姿は、sneak out、すでにない。これはブラインド・サイドを突いて、ダイモに向かっているのである。

会場の後片付けを少し手伝い、照明が消されて暗くなった佐野書院を出たナンバーエイトの私は、ロックとフランカーに追いつき、ダイモで乾杯の練習を数度行って、試合開始を待つ。なぜ、追いつけるのかというと、自転車という切り札で一橋大学構内を縦断するからである。

そもそも、大門でもなく、小酒井ダイモでも、大名でも、ダイナモでもなく、なぜ、「ダイモ」というのかを、聞いていないような気がする。こういうことを取材しないのは研究者として失格である。誰か知ってたら教えて下さい。

※　※　※

書物研の第一回は、二〇〇三年八月二日である。書物研史は二〇年目に突入！したのである。初回の会場は佐野書院ではなく、一橋大学職員集会所であった。これは大正風のレトロな洋館の雰囲気を漂わせている建造物である。普段、あまり使用していないので、少し黴くさかった記憶がある。

その後、一橋大学が「東京商科大学」だったころの、神田一ツ橋あたりの、一橋記念講堂で何度かやった。講堂は使用料が高くなったからか、使用しなくなり、佐野書院と職員集会所を併用するのが、二〇〇五年までつづいた。

東京・一橋を拠点とする例会だけではなく、各地域に出没しておこなう地域大会がある。これもコロナ災禍でなかなか開催が難しかったが、昨年二月、飛騨高山大会を行った。ただし、これはリモートとなった。今年三月四～五日は、第一五七回が京都大会となり、京都先端科学大学人文学部国際キョートロジー・センターと共催で研究会が開かれ、翌日は法藏館板木見学会となっている。徐々にかつての書物研に回帰しつつあり、喜ばしい限りである。

※　※　※

え～と、今号は頁数が余っているということなので、まだ書いていいの？　では、今度は、話題を変えて、自分の拙いフィールドワーク咄なぞを少し……。

ミネルヴァ書房から評伝『河井継之助』を出さなければ、と思いながら、まったく果たせず、忸怩たる思いである。申し訳なく、情けないが、昨年、河井継之助をめぐる状況が大きく変わることが二つあった。

一つは、ウクライナにおける戦争の勃発である。勤務校の授業で毎年、河井継之助を取り上げている。ここで継之助とは何者かを簡単に紹介しておきたい。戊辰戦争において「官軍」にも、奥羽列藩同盟にも、どちらにもつかず、武装中立した藩がただ一つあった。越後長岡藩で

ある。その武装中立を画策し、指揮した藩家老が継之助である。

授業感想で、「継之助や長岡藩は、武装する一方で中立を目指すのは欲張りである」とか、「中立するならば、なぜ武装するのか」と批判する学生が例年必ず数人いた。絶対平和主義 pacifism 的な批判である。授業ではそうした中立が可能になる条件や理論が整うのは、第二次世界大戦以降であり、戊辰戦争という戦時中立は、武装なくして可能性としてありえない、つまりは武装なくして中立なし！　それを前提に考えるように、と力説しているにもかかわらず、である。

ところが、昨年二月ロシア軍がウクライナに侵攻した。その後、七月に武装中立についての授業を行ったところ、右のような批判はゼロだった。想像するに、武装や軍備についての意識が変化したのだと思う。コロナの影響で撮影が遅れ、昨年封切られた、役所広司主演・小泉堯史監督の映画『峠　最後のサムライ』もヒットしたらしい。主人公は継之助。この映画の感想を書いた者が二人いた。

映画の原作は、司馬遼太郎の『峠』で、これまで四〇〇万部近く発行された歴史小説である。その「あとがき」のなかで、司馬は継之助のことを「侍」と評している。それで映画のサブタイトルも「最後のサムライ」となっている。私は継之助は一藩の藩政を任された人物であり、天道委任論に基づく仁政思想の持ち主と考えているので、「侍」とは見ていない。士大夫の為政者と考えている。

それはともかく、ウクライナ以降の継之助評価の変化は、歴史的条件・差異を超えて、かなり危うい面をもっている。この国をめぐる環境や報道では、たとえば台湾有事の危険性を煽り、岸田政権は軍拡に舵をきり、ミサイルを買うため、増税やむなし……大きく右に旋回している。この国に生きる人びとも、財源には異論があるのかもしれないが、軍備は必要と考えているようである。「国防」とは、いったい何なのか。

※　※　※

この映画の上映が、継之助をめぐる環境の変化の第二である。昨年の夏、長岡市である展示会が開かれた。それは、江戸時代に代々庄屋をつとめてきた「旧長谷川家住宅」で開催された。長谷川邸は、現在は長岡市だが、市に合併・編入される前は越路町に属していたので、越路町といったほうがピンと来る人がいるかもしれない。

展示タイトルは「峠のむこう　9代久静が記録した河井継之助と戊辰戦争」である。この展示を知ったのは偶然である。ネットで映画について「峠」というキーワードを検索していて、偶然ヒットした。展示期間は七月一〇日～九月二五日。気づいたときは、展示終了まで、二週間程度しか残されておらず、「もう行くしかない」と、即座に決断して、新幹線を乗り継いで長岡を訪れた。

研究調査出張は三年ぶりだ。長岡に到

着したのは九月一〇日だった。長岡駅から河井継之助記念館に直行した。この前館長で継之助の本を多数出版していたのが稲川明雄氏である。稲川氏は、一昨年亡くなられ、新しい館長になった。展示に変化があるかもしれないと考えたのだった。新館長は中田仁司氏という。名刺を交換すると、氏は、

「この名前、どっかで見た記憶があるんだがなあ……」

と、しばらく考えていた様子だが、

「あ、きのう読んでいた本の著者か！」

という。偶然にも、昨晩、拙著『文武の藩儒者　秋山景山』を読んでいたのだという。景山は長岡藩の藩校の初代都講、校長であり、藩の天保改革政策を立案した人物である。

受付の方たちが、ざわざわしている。あろうことか、私が来館一七万人目なのだという。記念品をいただき、継之助の銅像の前で、新館長と記念撮影ということになった……。

記念館には何度かいっているが、これまでにない参観者数で混雑していた。遠くから来ている人も少なからずいるようだ。

（この分では、明日の長谷川邸の展示もきっと参観者が多いに違いない）

と用心した。そういえば、この日のホテルの予約もやっととれたほどで、多数の観光客が長岡を訪れているようだ。館長に、

「何か、継之助・「峠」関連のイベントでもやるのですか？」

と聞いてみたが、「さあ？」という返事であった。

※　※　※

翌日、長谷川邸に向かう。長岡駅からJR信越本線に乗車する。ローカル線でガラガラだろう、と思っていたが　結構、座席が埋まった。

（この人たちは、きっと「峠」展に行くにちがいない）

と思った。長谷川邸最寄りの塚山駅で下車。案に相違して、降りたのは私一人だった。

残暑厳しく日傘を差した。ヨネックスの大きな工場を横切っていくと、両手をひろげた銅像があった。三波春夫である。彼は、この地域の出身らしい。もともとは浪曲師であったことを知る。数々のヒット曲があるが、私が一番にパッと思い浮かべるのは、一九七〇年の大阪万博のテーマソング、「世界の国からこんにちは」である。

長谷川邸は予想以上に大きかった。満満と水を湛えた壕が敷地を一周している。長屋門があったので、そこが入り口かとおもったら、それは裏門で閉ざされていた。

（長屋門なのに裏門……）

表に回ると、映画「峠」の役所広司のポスターが貼ってあり、「ロケ地」とあった。戊辰戦争の長岡藩を中心とする戦争を、北越戦争という。長岡藩は「官軍」に長岡城を奪われた後、八丁沖という湿

地帯を踏破する奇襲に成功し、城を奪還する。その後、継之助は戦闘の指揮の最中、足を撃たれて負傷し、野戦病院となっていた昌福寺に運びこまれる。長谷川邸では、この昌福寺のシーンが撮影されたらしい。

敷地の一角に資料室がある。元は米倉であった。母屋を出、資料室に向かった。

（資料室は人でごったがえしているに違いない）

と考えながら入り口を抜けると、これも意外、閲覧者は一人しかいなかった。事前に、

「閲覧者の邪魔にならないようにしますので、撮影許可をください」

と申請していた。継之助ファンが押し寄せているだろうと想像していたので、邪魔にならないように撮影する。長丁場になるだろうと考えていた。実際は、閑散としていた。在館一時間ほどのうち、来館したのは他に四、五名ほどであった。予想外であり、拍子抜けした。しかも、この日は、平日ではなく、日曜日なのである。後でわかったことだが、長岡の宿泊客の多いのも、電車が混んでいたのも、新潟県の三大花火の一つ、片貝花火大会のためだった。

自分一人の展示室で、継之助を独り占めするようで、なんだか嬉しい気分になり、史料を撮影・解読しはじめた。主な史料は戊辰戦争当時の長谷川家当主であった久静の日記である。

※　※　※

長谷川家のある地域は、近世は塚野山村と呼ばれていた。この村に長谷川家が土着したのは近世前期、慶長以前とされる。塚野山村の石高は三三〇石程度で、やや小さい村である。長谷川家は一七世紀後半の天和年間には、すでに七〇石程度を所持していたが、その後、急速に持高を増やし、新田開発を行い、酒造業、質屋、問屋業などを行った。一八世紀半ばには、村外の土地にも手を伸ばし、四〇〇石近くを所持する大地主に成長した。長谷川家は長岡藩領ではなく、幕末期は上ノ山藩領であった。戊辰戦争時には、旧幕府軍の衝鋒隊が駐屯したこともある。

展示史料に戻ろう。私の目はすぐに日記の記述に釘付けとなった。たとえば、次のような記述である。

〇（慶應四年）三月、フランス人四人同船ニ而、長岡河合（河井）様新潟着、長岡諸士「河合参候へ殺」抔噂候へ共、中々左様ニハ無之、廿三日ハ「壱万五千両大筒御ためし」と申噂、右三丁之筒ハ稀品、土州ニ而心懸候へ共、河合様格別親厚故、フランス人賣候由、筒ノ名海内一云

最後の「云」は、ト云（と言う）の合字である。日記の情報は伝聞を書き留めたものなので、事実かどうか、ウラどりをしなければならない。

河井が長岡に帰着したら「殺」すとあるのは、噂ではなく事実である。藩校崇

徳館の教員・酒井貞蔵が斬奸状を書き、天朝の「官軍」に従わない継之助を暗殺すると公言して憚らなかった。次に、三門の「大筒」とは、ガトリング砲（銃）のことである。米国において南北戦争の一八六二年に発明され、ライフルのバレルのような砲身が、レンコン型に並んでおり、それを回転させて発射すると、一分間に二〇〇～三〇〇弾連射できたとされる。機関銃に近い。

継之助がこの兵器を入手したのはスネル兄弟で、彼らはフランス人ではない。が、「官軍」であふれるこの時期の関東地方を離れるのに、幕府の軍事顧問団であるフランス人たちが、海路で一緒になっているのは、ありそうな話ではある。

この船は長岡藩の持ち船ではなく、チャーター船であり、横浜から出航した。途中、彼らは奥羽の仙台か、箱館あたりで降りたのかもしれない。長岡に到来したガトリングは、日記のように三門ではなく、実際は二門である。ただし、一門五千両とされるので、三門であれば一万五千両で数字は合っている。

さらに史料をみていくと、このガトリングは横に薙ぐようにスイングさせることができず、上下にしか動かなかったので、あまり役に立たなかったという記述もあった。

これは昨日、記念館を訪ねたとき、記念館の友の会会長・星貢氏がおっしゃっていたことと一致する。星氏は、戊辰戦争の銃砲に精通しており、非常に勉強になった。そのとき、横に動かないガトリングの話がでて、星氏は「そんなことがあるのか？」と疑問に思い調べてみると、一時期作られていたことがわかったという。南北戦争で塹壕戦になり、塹壕に引き込んで使用するため、左右に動かないガトリングが製作されたらしい、という。

※　※　※

日記のどの記述もこれまで知らないことが多く、発見！　発見！に次ぐ、また発見！　という感じで、あっという間に時間が過ぎていった。

従来の長岡藩研究における民衆像は、戦後歴史学の人民闘争史観・百姓一揆史観によるもので、長岡藩領のなかで、城下から離れた蒲原郡や栃尾の藩権力と闘う民衆の掘り起こしでつくられた。

また、継之助に対しても、この歴史観が投影されて、戊辰戦争では、戦火に巻き込まれた被害者として、継之助の武装中立に批判的な民衆が描かれてきたように思える。

もちろん、こうした視点も重要だが、民衆は別の顔ももっている。私は牧民の思想や前掲書の秋山景山研究により、長岡藩の城下に近い村落のなかに、藩権力と結びつき、また、藩学を学ぶ民衆がいたことを明らかにした。

久静の日記は、継之助の改革に期待を寄せ、好奇の視線で捉えており、非常に新鮮であった。戊辰戦争に対して、単なる被害者ではなく、積極的に関心をもち、したたかに立ち回る民衆像をうかがうこ

とができる。

展示を見終え、興奮しながら、塚山駅に向かった。衝撃だったのは、庄屋が戊辰戦争と長岡藩の行方を知るために詳細な情報収集していたことである。そして、久静の継之助関連の記述は、戊辰戦争以前から存在するのだが、概ね好意的であり、諧謔性も交えて、これまで見たことのない継之助の人物像が生き生きと活写されている。

（継さ、ここにおったか！）

この日記を見るとみないとでは、継之助像がまったく違ってくるのではないか、と思われるほどの同時代人の一級史料といえる。

（これで評伝が書き始められる）

という期待感、満足感に浸りながら、九月というのに、気温三二度のアスファルトを駅まで歩いた。

※　※　※

翌日は、名古屋に戻る。

その前に、長岡市立科学博物館に向かった。歴史研究室の広井造学芸係長に話を伺うためである。広井氏は長岡藩九代藩主・牧野忠精など、長岡藩の研究もされており、長岡藩の史料について詳しく把握されている。館に着くと、牧野忠昌氏が在館しているという。

忠昌氏は、長岡藩主牧野家の系譜を継いでいる御子孫である。科学博物館内には、長岡藩主牧野家史料館が併設されており、忠昌氏が名誉館長を務めている。常勤しているわけではなく、今日はたまたま在館されていた。

九代藩主・忠精の藩政を支え、長岡藩の天明改革を指揮したのは、家老・山本老迂齋である。まず、老迂齋の史料を閲覧させていただいた。私も昨日、古本屋で購入した老迂齋の刊本を披露した。「山本青城拓本」とあるが、拓本ではなく、書道の手本・鑑賞の法帖である。

次に史料館で新しく展示された継之助の書簡を名誉館長の許可を得て、撮影させていただいた。江戸の継之助から、長岡の父代右衛門宛の書簡である。夏の梅雨のことで、ジメジメして大変で服も汚れがちだが、妻のおすががよく洗濯しているといったような、継之助の日常がよくわかる書簡である。書簡は元治元年（一八六四）と推定され、藩主の出府にともなって継之助も江戸にでていた。

最後に、互尊文庫の史料が移転するというので、情報を収集しにいった。ここの収蔵史料を撮影するのに、何度通ったのか数え切れない。

そして、すべての取材を終え、上越新幹線に乗った。わずか数日の滞在なのに、非常にたくさんの人と会い、たくさんの情報を得た。

（やはり、フィールドワークって、いいもんだな）

と、ごく当たり前のことを強く思った。当たり前のことが、当たり前でなくなったのがコロナ災禍である。人と会い、話をすること。なにものにも代えがたい。今年は、書きます。

（小川記）